

国語 (40分)

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本発のロボット・ソリューションはどのようなビジネスになるのでしょうか。

ロボット自体は組み合わせの技術ですから、性能の良し悪しがあるにしても、新興国でも作ることができます。日本が品質で圧倒的に優れているからビジネスでも勝てるかというところ、そういうわけにはいきません。

たとえば、家電業界では日本の製品が品質や耐久性など総合的な性能は優れていると思いますが、日本市場以外のグローバルビジネスでは負けてしまいました。自動車業界でも、韓国勢が猛烈に追い上げてきています。品質は日本車のほうが優れていても、価格を天秤にかけると韓国車でいいという消費者も多いのです。

家電や自動車は、まさに日本が成功した大量生産、大量消費型のビジネスモデルの代表です。設備投資は巨額だけれども、大量に生産し販売することにより、設備を償却したあとは稼働益で儲けていくというものです。

これからのロボット産業は **A**、このモデルは使えませんが、生産販売台数は大量ではないけれども、日本のソリューションの価値を認めた人に最大限のサービスを提供し、そのサービスに見合った報酬を得るというビジネスモデルになります。ですから、産業のキボは大きくても、サービスを提供するのは必ずしも大企業とは限りません。

その際に私が想起するのが、「ナショナルショップ」です。松下幸之助が松下電器を家電のトップメーカーにまで成長させる **イナモト** になった地域密着型のビジネスモデルで、全国に約5万店ありました。「あの店の社長は一生懸命にやってくれはるから、あそこに頼もうやないか」と言って、顧客は家電製品をすべてナショナルショップから買っていたのです。

必要とされるロボットのソリューションは、コミュニティや人によって異なるため、カスタマイズが必要になります。ですから、ナショナルショップのようなロボットショップが必要になるのではないのでしょうか。「このロボット、ちょっとおかしいんだけど、見てくれる」「ほんなら、すぐ見ましょ」といった親しみのあるやりとりで修理してもらおうのです。

家電のショップは、アメリカナイゼーションの波を受けて量販店へと変わっていきましたが、その量販店もインターネットショップピンクに押されて経営が行き詰まっています。これからはもう一度、地域のロボットショップでロボットのメンテ・サービスをする時代が来るのではないかと思います。

こうした近未来像が正しいかどうかは誰にもわかりませんが、**B** 技術開発に終始してきたロボット産業がブレイクスルーするために、新たな見取り図を描かなければならないのは確かです。

ロボット革命を起こしていくうえで、ポイントになると私が考えていることを箇条書きにすると、次の通りになります。

* 高齢者や女性、そして子どもたちが輝く社会を目指す。

* 現在、15歳から65歳までとなっている労働人口を75歳までに引き上げ、働けるうちは生き甲斐を持って元気に働く幸せな人生を実現する。

* 一般の人に参画してもらい、ロボットを活用する実証実験を各地で始める。

* 老若男女みんなの意見を入れてシステムをコウチクする。

* 技術をどう使うかについて、将来起こりうるであろうと予想されることも含め、真剣に考えていく風土を醸成する。

日本のロボット革命が成功する鍵は、サービスロボットをどのように社会へ導入していくかにあります。

サービスロボットは、労働集約型の現場に入り込みますから、**C** ある階層の人の仕事を奪うでしょう。ロボットが人の仕事を奪うのです。しかし、その一方で別の階層の人たちの仕事は確実に効率が悪くなります。生産性が上がることで、余暇に時間が取れ、充実した生活を送ることができるようになることも、かなりの確度を持って予想されます。

新しい技術には必ず、光と影があります。ですから、必ずしもバラ色のことばかりではないことをしっかり認識しなければなりません。私たち自身がどのような未来を選ぶかという選択の時代が来ているのです。

その際に重要なのは、その選択をするのは国家ではなく、私たち一般庶民であるということです。なぜならロボットは私たち一般庶民が自分の意思で活用できる先端技術であり、今話題のIPS細胞の技術などのように専門家しかソウサできない特殊な技術とはまったく正反対のものであるからです。

日本人がその事実気づくかどうか、日本が今後ロボット革命でリーダーシップをとって、再び「日出づる処の国」となれるかどうかを決めるのではないかと私は考えています。その意味では、ロボット革命を成し遂げるうえで、マスコミの役割は非常に大きいものがあります。

ロボット技術は、必ずしも必要不可欠なものではありません。したがって、ロボット革命の **D** は、私たち自身がロボット技術を使って自分たちの未来をどのように創っていくのかという選択にかかっています。

ロボットの拓く未来が豊かな世界になるか暗黒の世界になるかは、まさに私たち自身の手にユダネられているのです。

(本田幸夫「ロボット革命——なぜグーグルとアマゾンが投資するのか」より)

- 注1 ソリューション……解決すること。ここではロボットの力を用いて社会的な問題を解決することを指す。
注2 設備を償却……設備を購入した代金分を稼ぎ、借金を返すこと。
注3 稼働益……設備を動かし、生産をしていくことで利益を上げていくこと。
注4 アメリカナイゼーション……欧米のシステムのまねをしたり、欧米のやり方をそのまま日本で実践すること。
注5 ブレイクスルー……問題の解決をきっかけに急成長すること。
注6 参画……積極的に参加し、加わること。
注7 「日出づる処の国」……「太陽が昇る国」のように、成長著しく強力な国であることを示す表現。

(1) ……線アゝオのカタカナの部分に漢字に直しなさい。

- (2) —線①「そういうわけにはいきません」とありますが、なぜですか。その理由を説明した次の文の□にあてはまる語句や表現を考えて答えなさい。

日本の製品には□Ⅰ□という利点があるが、他国の製品は日本より□Ⅱ□という利点があるから。

- (3) □A□□C□にあてはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを次のアゝエから一つ選び、記号で答えなさい。

ア	A	きっと	B	必ず	C	おそらく
イ	A	おそらく	B	少なくとも	C	必ず
ウ	A	必ず、	B	少なくとも	C	おそらく
エ	A	おそらく	B	ほとんど	C	きっと

- (4) —線②「私が想起するのが、『ナショナルショップ』です」とありますが、筆者は「ナショナルショップ」の店員と店で何ができることに良さを感じていますか。それを表した表現を文章中から十字で抜き出しなさい。

- (5) —線③「新たな見取り図を描かなければならない」とありますが、ここでいう「見取り図を描く」とはどうすることですか。最も適切なものを次のアゝエから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ロボットと人がどのように協力していくのかを考えていくこと。
イ ロボット開発のための資金をどのように使うかを考えていくこと。
ウ ロボットを売ったり修理したりする方法を考えていくこと。
エ ロボットの設計図や人が驚くような機能を考えていくこと。

- (6) —線④「ポイントになると私が考えていること」とありますが、これはどのような観点からの考えだと言えますか。適切なものを次のアゝオから全て選び、記号で答えなさい。

ア 面倒なことをロボットに任せ、楽に暮らせるようにするという観点。
イ ロボットがもたらす危険も考え、慎重にロボットを使うという観点。
ウ 社会的弱者と言われる人々が社会で活躍できるようにするという観点。
エ 大人ではなく若者が得ることができるようにするという観点。
オ 誰にとっても不自由のない暮らしやすい社会を作るという観点。

- (7) —線⑤「ロボットが人の仕事を奪う」とありますが、あなたの身の回りや社会の変化をもとにして、これから「ロボットに奪われるだろう」と考えられる「仕事」を一つ挙げなさい。

- (8) —線⑥「光と影があります」とありますが、ここでの「光」とは何のことを指していますか。文章中の言葉を使って説明しなさい。

- (9) —線⑦「その事実」とはどのような事実ですか。「ゝ」という事実。」に続くように文章中の言葉を使って説明しなさい。

- (10) □D□にあてはまる語句として最も適切なものを次のアゝオから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 増減 イ 成否 ウ 新旧 エ 優劣 オ 難易

(11) この文章の内容として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 社会の中にロボットが入ること、必ず今よりも便利で楽しい社会になるので、早く改革するべきだ。
イ ロボットの販売も、いずれは今の家電と同じようにインターネットショッピングで売るのが成功する。
ウ ロボット革命は簡単なことではないので、一般庶民ではなく専門家が主体となって進めていくべきだ。
エ 人それぞれの問題に対応するため、これからのロボットはその人に合わせてそれぞれ変えることが必要だ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「僕」は、いっしょにジャグリングクラブを立ち上げることになった同級生の「ドカ」、「ムクちゃん」、「ヒコザ」や、「ジン先生」と中華料理店を訪れた。そこで「ジン先生」が「僕」たちのいる東玉川高校へ来たいきさつを聞いているうちに、「ヒコザ」は、「ジン先生」に逃げるようなオトナはカッコ悪いという話を投げかけた。それは会社から退職に追い込まれ、再就職のために田舎の鳥取へ帰っている父親のことを「ヒコザ」は逃げていっていると感じていたからだ。 「ジン先生」は「ヒコザ」に答えるようにオトナの役目という話を話し始め、その話の途中で、アフリカで生まれた人類がなぜ長い時間をかけて世界中に散らばっていったのか、ということ問いかけた。

先生はみんなを見回して、誰も答えられないのを確かめてから話を先に進めた。

「いまからオレが言うことは、Aにはなんの根拠もないんだけど……でも、覚えておいてほしいことなんだ」

そんな前置きをして、「二種類の連中が旅をしたんだ」と、Vサインのように指を二本立てた。

一つは——なにをやらせてもダメな、さえない奴ら。冗談かと思ったが、先生の顔は真剣だった。

もう一つは——なにをやらせても文句ばかりつける、甘ったれな奴らに生意気な奴ら。これも真剣に言った。

「集団の中でしっかり馴染んで、言ってみれば『勝ち組』の中に入っているような連中は、無理をして別の場所に旅立つ必要なんかないってことだ。そうだろう？ いまの環境が自分にとってカイテキで、居心地がよくて、幸せだったら、わざわざ苦労してよそにウツらなくてもいいんだから」

言われてみればそのとおりだった。

「でも、集団の中には『負け組』だっている。食べ物がなかなか回ってこない奴もいるし、強い連中に好き勝手にこき使われる、パシリみたいな奴もいる。そんな連中にとっては、このままここに残っているより、新天地に旅立ったほうがずっといいってことだ」

「……逃げるってことですか？」

ヒコザが納得できない顔で言った。また親父さんのことを先生の話に乗っているのかもしれない。

「逃げていいんだよ」

先生はきっぱりと、こんな簡単なこともわからないのか、と少しあきれたように言った。

『逃げる』っていうのはスタートダッシュのときだけの物の見方だ。走りだしたあとは、どこかに『向かう』ってことに変わる。それでいいじゃないか」

僕たちはみんな、すごい屁理屈だなあ、という顔になった。でも、不思議と説得力も感じてしまう。

先生はつづけて、もう一つの旅立ちのパターンについて話していった。

「いつの時代にも、どこの世界にも、文句ばかり言う奴ってのはいるもんだ。それも、オトナに向かっ②てな。向こうにも山が見えるのに、なんでオトナたちは、この森の外に行こうとしないんだ、あいつらは臆病者だ、でもオレたちは違うんだ……って、カッコ悪いオトナたちへの反発で旅立つわけだよ」

厨房からウメさんが食器を洗う水音が聞こえた。

「未知の世界に旅立とうとしないカッコ悪いオトナがいてくれたからこそ、若くて生意気な連中が外に出て行けたわけだ」
ほんとうに、まったくもって、とんでもない屁理屈だった。

「で、そういう奴らがオトナになって、自分たちの住む森や草原を見つけて、集落をつくって……そうしたら次の世代の若い連中が、また文句を言いだすわけだ。カッコ悪いよおまえらサイテーだよ、なんで外に飛び出して行かないんだよ、なんて言われて……若い連中がまた旅立って、で、そいつらもオトナになって……また次の世代が文句言いながら外に飛び出して……」

先生はそこで言葉を切って、「そうやって人類は地球のあちこちに散らばっていったんだ」と話をまとめた。
パチパチパチ——ムクちゃん、拍手はしなくていいの。ほんとに。

「オトナがカッコ悪いほうが、ガキにも勝負できるヨチがあるんだ。ものわかりがよくて、スーパーマンみたいになんでもできるオトナだらけだったら、若い連中はかえって窮屈になっちゃうんじゃないか？」

「でも……」ヒコザが言った。「カッコいいオトナに憧れた方がいいんじゃないんですか？」

そうそう、だよな、だよな、とまわりの連中もうなずいたが、先生は余裕の笑みを浮かべて、「『カッコいい』ってなんなんだ？」と逆にヒコザに訊いた。

「だから……それはオレらがこんなオトナになりたいって憧れるような感じの……」

「そうか、お手本が欲しいってことか。お手本がなかったら、オトナになれるか」

「いや、あのお手本っていうのは、ちょっと違って……目標っていうか……」

「考えてみれば不思議だよなあ。若い奴らって、よく言うだろ、自分だけの人生とか夢とか、オレはオレだけの道を行くとか、他人の敷いたレールの上は走りたくないとか……でも、お手本が欲しいのか？」

屁理屈番長のヒコザが、言葉に詰まった。

「ちょっと意地悪なこと言っちゃったかな」

苦笑いを浮かべてヒコザをフォローして、「でもな、オレは思うんだ」とつつける。

「オトナなんて、高校生から見れば、みーんなカッコ悪いんだよ。特に、身近にいればいるほどな。それでいいんだ、きみたちはどんな文句言って、あんなカッコ悪いオトナにはなりたくないよな、なんて思っ……それできみら自身がカッコいい人生を目指せばいいわけだ」

ヒコザが「そんなの無責任じゃないですか」と口をとがらせると、先生は「なんで？」と、きょとんとした顔になった。

「だって……カッコ悪くてもいいなんて、開き直りっていうか……」

わかるわかる、と先生はうなずいた。

そして、**B** 言った。

⑤「甘えるな」

一瞬、店の空気がこわばった。先生の顔や声は怒っているわけではないのに、こっちの身動きを封じめるような強さがあつた。

厨房の水音が急に大きくなった。ウメさんが蛇口を一杯に開いて、竹のササラで中華鍋を洗いはじめたのだ。

「あんな、ヒコザくん。カッコよく生きるギムなんて、世の中、どこにもないんだぞ。言ってみれば、おまえたちのお好みどおりのオトナになる必要なんてないってことだ」

先生はヒコザに語りかけているのに、僕の胸がドキドキする。先生の声は、ついでに聞こえてくるのではなくて、まっすぐに僕に向かっている。みんなも同じなのか、静まりかえった店内の沈黙が**C** 引き締まった。

「オトナが子どもに対して責任を持たなきゃいけないのは、たった一つしかないんだ。一所懸命に生きること……それだけなんだ」
ドキドキする、ほんとうに。息が詰まる。まばたきすら忘れて、僕はじっと先生を見つめる。

⑦「一所懸命に生きててもカッコ悪いことはあるし、一所懸命になればなるほど、どんどんカッコ悪くなることだってある。でもな、それでいいんだよ。オトナは自分のカッコいいところを子どもに見せたくて生きてるわけじゃない。ただひたすら、一所懸命に生きてるだけなんだ……」

先生は「ヒコザくんの親父さんだって、そうじゃないのか？」と言った。

その直後、カーン、と厨房から鍋をお玉で叩く音が聞こえた。

先生はそれを聞いて満足そうに大きく何度もうなずきながら席を立つ。

「おばちゃん、お勘定。富士山炒飯と餃子はオレのオゴリで、あとはワリカンってことで」

ウメさんは中華鍋とお玉を持ったまま、「また顔出すんだろ、ジンちゃん」と言った。「卒業式の日にまとめて払ってくれればいいから」

「……店のほうからツケにしろって言うわけ？」

「いいんだよ、わたしの勝手だろ。その代わり、またおいで。毎日でもいいから、おばちゃんのラーメン食べなさい」

あんたはズーッと不義理してたんだからさあ、と怒った声で言いながら、ウメさんは大きな中華鍋を振って水を切る。ほんとにさあ、いじいじちゃってさあ、おばちゃんさびしかったよ……と、何度も鍋を振って、飛沫をびゅんびゅん飛ばす。

先生は黙ってウメさんに頭を下げて、僕たちを振り向いた。「あと一つ、言わせてくれ」——写真の中のヤノジさんみたいな、泣き笑いの顔で。

「人間、一所懸命に生きてるときって、あんがいカッコ悪いものなんだ。全力疾走してる顔ってヘンだろ？ それを無理してカッコいいって思う必要はない。でもな、カッコ悪い一所懸命さを認めろよ。憧れなくてもいいから、親父もやるじゃん、母ちゃんもがんばってんじゃん、先生も必死じゃん……ってな。で、おまえらは自分の考えるカッコよさを目指せ。オトナにお手本を示せなんて甘えずに、自分の道を一人で歩いてみる」

ヒコザはなにも応えなかったが、眼鏡の奥で目をしょぼつかせているのがわかる。

「最初の話に戻るとな、新しい世界を探しに旅立つのは、いまの世界で勝ち誇ってる連中じゃない。オトナとうまくやってる連中でもない。さえない連中や、文句ばかりの連中や、オトナのカッコ悪さにむかついてる奴ら……そういうワカゾーが、世界をどんどん広げていったんだ」

僕たち全員を、ビッと指差した。

「おまえらのことだっ」

わはははっ、と笑った。

「旅立て、ワカゾー！ レッツ・ビギン！」

じゃあなっ、と頭にタオルをマいたまま、颯爽と外に出て行った。

- (1) 〰〰線ア〰オのカタカナの部分の漢字に直しなさい。

- (2)

A

にあてはまる語句として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間的 イ 進歩的 ウ 感情的 エ 科学的

- (3) 線①「そのとおり」とありますが、「僕」はどのようなことに「そのとおり」だと感じているのですか。文章中の言葉を使って説明しなさい。

- (4) 線②「オトナに向かって」とありますが、ここでの「オトナ」とはどのような「オトナ」のことを指していますか。文章の中から八字で抜き出しなさい。

- (5) 線③「そうやって」とありますが、「ジン先生」が考える、人類が地球に散らばる過程とはどのようなことですか。最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 未開の土地へ向かっていく勇氣を持たないオトナに反発した若者たちが旅立つということを繰り返していくこと。
イ オトナが恐れる場所に向かい、自分が勇氣のある一人前の人間だと認めてもらおうと、探検を繰り返していくこと。
ウ 自分たちの住む森や集落に対し不満を持ち、より住みよい場所を目指してみんなで引っ越しを繰り返していくこと。
エ オトナと若者がお互いに意見を言い合ったり戦ったりして、負けた方が村を出ていくことを繰り返していくこと。

- (6) 線④「口をとがらせる」の意味として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不思議そうにする イ 驚いてみせる ウ 不満そうにする エ 困ってみせる

- (7)

B

、

C

にあてはまる語句として適切なものを次のア～キから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア のんびりと イ けろっと ウ にこっと エ キュッと オ ピカッと カ ふわっと キ ぴしやりと

- (8) 線⑤「甘えるな」とありますが、「ジン先生」はどのようなことを「甘え」だと考えているのですか。文章中の言葉を使って説明しなさい。

- (9) 線⑥「息が詰まる」とありますが、この時の「僕」について説明したものととして最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 急に怒り出した先生と、何も言い返せないヒコザの様子を見て、次に何が起きるのか緊張している。
イ みんなが先生に注目しているので、自分も先生の話を真剣に聞かなければならないと集中している。
ウ 先生はヒコザに話しているのだが、先生の言うことが心に響き、自分も先生の話に聞き入っている。
エ 先生の話は自分の今までの考えと違ったので、どこかに反論できるところがないかと探している。

- (10) 線⑦「一所懸命に生きてカッコ悪いことはある」とありますが、文章中で「一所懸命」なのに「カッコ悪い」例として挙げられている人物を十字で抜き出しなさい。

- (11) 文章中では、かぎカッコ「」がつけられていない「ウメさん」のセリフがあります。その「ウメさん」のセリフにあたる部分を文章中から二カ所抜き出し、それぞれ最初と最後の三字を書きなさい。(句読点や符号は字数に含みません)

- (12) 文章の中から分かる「ジン先生」の説明として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の話の邪魔をされるのを嫌って怒るところもあるが、子どもたちにも真剣に話す誠実さがある人物。
イ オトナはカッコ悪いとするのは誤解だと感じ、子どもにも分かるように丁寧に説明する優しい人物。
ウ 熱心に話をする所もあるが、子ども相手に意地悪な質問をして泣かせてしまう大人げない部分もある人物。
エ 子どもの考えに理解を示しながらも、オトナと若者の生き方について自分なりの主張を持つ人物。

国語 解答用紙

受験
番号

得点

一																						
(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)		(1)											
									II	I	ア											
											イ											
													ウ									
															エ							
																	オ					
																			ね			

という事実。

二																								
(12)	(11)		(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)												
	.	.				B						ア												
						イ																		
													C											
															ら									
																	ウ							
																			エ					
																					オ			
																							いた	